〈喫煙室〉

日だまりの中で

〝私は晩秋が好き〟小春日和の暖かい或日曜日の午後など，陽だまりの縁側に腰をかけ，のんびりとあちこち庭をながめつつ晩秋の感触を味わうのも，心の安らぎには大切なひとときと思う。

思う存分枝を張り，のびきった雑木の梢の先に落ちそこなった幾枚かの〝わくらば〟が，かすかにふれあい動ようしている様は，深みゆく秋のもののあわれを象徴するかのようで，胸に小さな感動をおぼえる。

紅に燃えた〝ドウダンツツジ〟の葉は，幾度か訪れた霜の洗礼に，過ぎし日の勇者の姿はそこに失せ，沈み勝ちに黒い実を垂れている。

取り残された草の葉もうす茶色に色あせ，やがて生まれいずるもののための良き保護者として最後の力を出しているかのようで，またあわれさが入増す。

枝から枝へ〝えさ〟を求めて飛び交う鳥の鳴声も，けたたましいモズからいつしかチチ…と可れんに鳴く鳥の声に移り変った。夏の間，鳥のよきねぐらであった山コブシの大木はほとんど葉を落とし，太陽の日ざしをあたりに放射状にふりそそぐよき仲介者として厳然とそびえたっている。

落葉の間から藪こうじがまっかな顔をみせはじめると，冬将軍の到来も間近かと，思わず衿をかき合せたくなる。

しかし，この可れんな藪こうじを，香り高い日本水仙に添わしめ，新らしき年の始めを花生けに飾るよろこびを待つたのしさを思うとき，きびしい冬将軍の到来にも少なからぬ親近を感じさせられる。

〝散らばれる　庭の落葉の少なさに
　　秋も深むと　思うわびしさ〟

詠み人の名は忘れたが，この歌が頭をよぎるのもこの季節である。毎朝，箒持つ手も忙しく落葉かきした過ぎし日々であったが，気がついてみれば，ほんとにこの二，三日，目にみえて落葉が少なくなった。あしたはもっと少なくなることだろう。落ち葉をかき集めやき芋をしてくれた母……。白いけむりに目をこすりながらじっと気長に手をかざし，時々一枚，二枚と落葉を火にくべ，無心に眺めたけむりの行手……。たき火のぬくもりと一緒に亡き母のぬくもりを一葉の落葉を手にして偶然心にふれたのも，ふけゆく秋の感傷かと思わず胸が熱くなるのをおぼえる。

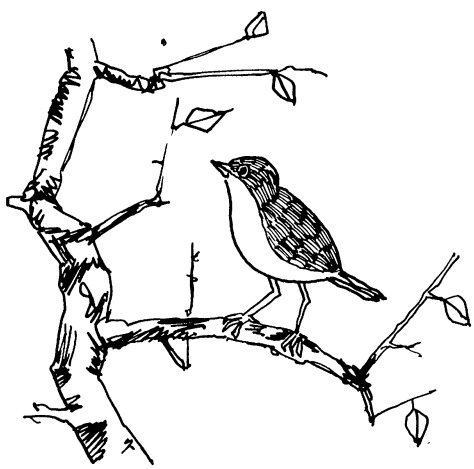
澄み渡った大空にぽっかり浮かぶ雲一つ，とっても美しい。あの雲のじゅうたんに乗って大空をかけめぐってみたいと，幼な子の心にかえるのも，あまりにも美しい絵のような浮き雲のせいだ。突然あらわれた飛行雲のあざやかな曲線に再び思いを過ぎし年月にはせる。

夢多き青春のなつかしきことなど，走馬燈の如く脳裏をかすめる。疑も，迷いも知らずひたすらに過ごした日々は，大空にえがかれたあの飛行機雲のようにはかなく消えてしまった。……

晩秋の別離と静けさは，おだやかに私の心の隙間を満たしてくれるであろうか。

葉がまた一葉落ちた。気がついてみたら日だまりもいつの間にか西に移動し，ほほに風が当たるのをおぼえた。

（1978　晩秋に記す　平野）



続・幻の魚を求めて

〈パート1〉

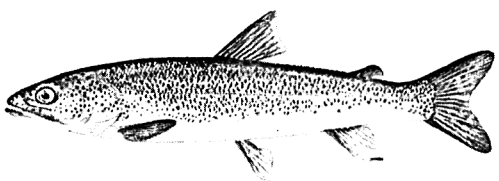
北海道の根釧原野と思しき風景の中で，1人の釣り師が背を丸めて糸を垂れている。どうも当りがないようである。そこで釣り師は持っていたウイスキーをぐっと飲み，頭をかしげる，というCMが以前テレビで放映されていたことがある。クレームがついて中止になったといういわくつきのCMであった。

根釧原野といえば，日本最大，最後の原野，自然の宝庫と数多い賛辞が寄せられているが，周囲の開発の波に洗われて，少しずつではあるが確実に，その中の自然は変質しつつあるといわれている。

「イトウ」というサケ科の魚がいる。「幻の魚」といわれ，以前にマンガで有名になったし，NHKでも特集を組んだくらいだからご存知の方も多いだろう。どん欲で，ヘビでさえ食べてしまうというこの魚，昔は青森県東部の小川原湖以北に分布していたというが，今は北海道にしかおらず，釣れることもまれであるとか。国外ではサハリンからクリール列島に分布している。

昨年，近くの水族館でこの魚と対面したが，本当に見るからに獰猛そうな面構えであった。

ちなみに私の名前も「イトウ」というのだが，現在統計課にいる60人の課員，またここ数年来転入転出した課員はもちろん，毎年のアルバイトの中にさえ「イトウ」という名は見あたらなかった。「スズキ」や「サトウ」と並んでありふれた名前の中に入っているはずの「イトウ」という名，よもや「幻のイトウ」となりつつあるのではないか，と秘かに恐れているのである。



図—1　イ　ト　ウ

〈パート2〉

200カイリの問題以来，イワシの評判がなかなか良い。あんまり評判が良いので，値も上りぎみらしい。需要が多ければ値上りするのは，経済の常道，これはいたしかたない。

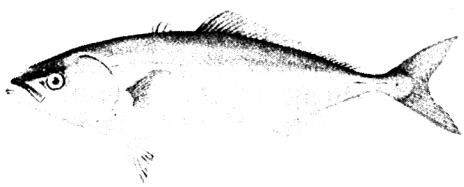
反面，養殖ハマチ（鰤）の評判はあんまりかんばしくない。文字どおり「魚の道に反する」ということではなく，なんでもエサのイワシの量より養殖ハマチとしての量が少ない，要するにむだな大飯ぐらいということらしい。それにしては値は下らない。需要が減らないということだろう。これも経済の常道である。

ハマチはスズキ目アジ科に属する。アジの仲間であるが，店先での待遇は雲泥の差である。

ハマチは出世魚だという。体長10cmぐらいまでをモジャコといい，これを採ってきてハマチに育てあげるのが，いわゆる作る漁業—養殖—である。

15cm前後になるとワカナゴ，これが30～40cmの若魚に育つとイナダ，ハマチと呼ばれるのである。ハマチが脂がのってうまい，というのは若いからである。これは魚に限らない。

さて，これが50cmをすぎて成魚となるとワラサ，ブリとなる。



図—2　ハ　マ　チ

ブリは寒ブリがうまい。ブリは鰤と書く。これには「老魚」という意がある。見るからに偉そうである。

これから10年，20年後もこの偉い魚を食べることができるのだろうか。世界的な食糧危機が叫ばれ，より効率的な食糧生産の必要性，世界的な食糧配分の不公平の是正などなど宇宙船地球号の行手には問題があまりにも多い。200カイリ問題の経過—つをたどってみても，その行手は決って真っすぐではあるまい。

ハマチも，そしてそれを食べる人間も幻と消えることのないようにしなければならない。　（伊藤）

資料　原色日本魚類図鑑　保育社
　　原色日本淡水魚類図鑑　保育社